

## 第4章

# 特徴的な学校の取組の紹介

児童生徒の学力を大きく伸ばした学校の実践を紹介します。

各学校において、本章で掲載されている児童生徒の学力の伸びを引き出した効果的な取組を、今後の取組の参考としてお役立てください。

今年度は、以下の8校の取組を紹介します。

志木市立志木小学校

深谷市立藤沢小学校

川口市立西中学校

横瀬町立横瀬中学校

川越市立高階北小学校

久喜市立桜田小学校

ふじみ野市立大井中学校

白岡市立篠津中学校





# 志木市立志木小学校の取組

## 1 本校の概要

本校は明治7年に開校し、創立147周年を迎えた。現在、児童数836名、30学級（特別支援学級4学級）の大規模校である。平成15年には志木市の公民館、図書館を併設する学社融合施設となった。学校地域目標を「明るくあいさつのできる子 思いやりのある子 地域を大切にする子 意欲的に学ぶ子」とし、ランドデザインには、「一人一人が生き生き輝く学校」を位置付け、学校、家庭、地域が一体となった教育活動を推進している。



また、令和2年度から3年間、志木市教育委員会から国語科の研究委嘱を受け、「伝え合う力を高めることで、自分の思いや考えを広げることができる児童の育成」をテーマに掲げ、言語活動を通して思考力・判断力・表現力を高める指導方法の工夫に取り組んでいる。

## 2 令和2・3年度の結果

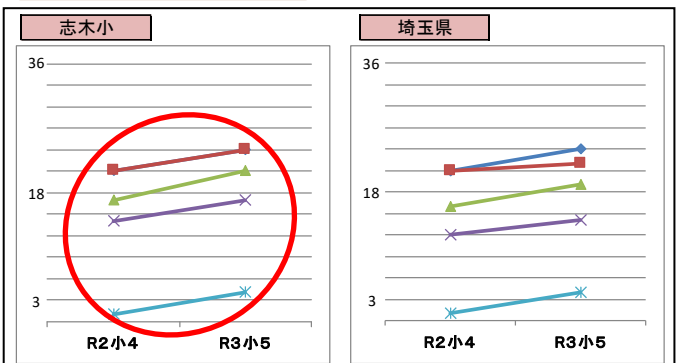
### 小学校4年生→小学校5年生の取組

#### (1) 学力の伸びから見られる特徴【国語】

##### 今までの学力の変化

	小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生	中学校3年生
レベル12						
レベル11						
レベル10						
レベル9						
レベル8						
レベル7						
レベル6						
レベル5						
レベル4						
レベル3						
レベル2						
レベル1						

##### 学力の伸びの状況



- 学力の伸びが県平均を2上回るとともに、学力のレベルが県平均を3上回っている。
- どの学力層の児童も学力を伸ばしている。

#### (2) 伸びを引き出した効果的な取組

##### ア 県学力・学習状況調査を活用した課題解決の取組

県学力・学習状況調査の結果の分析から記述式問題に課題があることがわかった。課題解決のために、学年ブロック毎に話し合いをもった。国語の授業を中心としながらも、教科横断的に自分の考えを書く機会を増やし、肯定し合う時間を確保していくことや、感想文を書く場合であっても条件（言葉の指定、文字数、段落数）を示して書くことを指導した。漢字・ことわざ・慣用句は辞書を使いながら全教科で活用した。学級掲示板に児童の感想文を多数掲示し、書くことへの意欲を育んできた。校内研修では、言語活動は方法であり目標ではないことを確認し、研究を進めた。

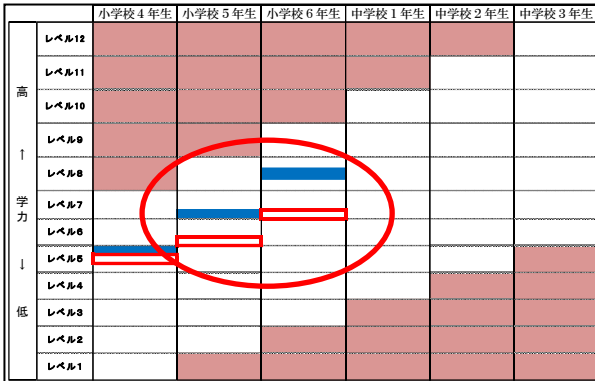
##### イ 図書館教育部と連携した環境整備

的確に情報検索を行ったり、情報手段の適切な活用したりする力を身に付け、主体的な学習を進めるためには、読書量を増やすことがポイントであると考え、単元の学習に関連した図書を揃え、並行読書を推進した。校内の言語環境を整備するため、月曜日は朝読書、木曜日は国語タイムを設定し、話す・聞く活動を取り入れた。併せて志木市立いろは遊学図書館と連携し、児童の司書体験活動や読書冊数が多い児童を積極的に表彰するなど、読書活動の充実を図った。

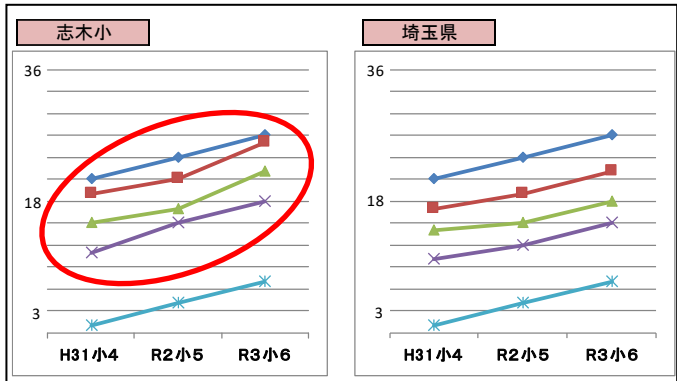
## 小学校5年生→小学校6年生の取組

### (1) 学力の伸びから見られる特徴【算数】

#### 今までの学力の変化



#### 学力の伸びの状況



- 学力の伸びが県平均より2上回るとともに、学力のレベルが県平均を4上回っている。
- 全体的に学力の伸びが見られるが、特に中位層がより伸びている。

### (2) 伸びを引き出した効果的な取組

#### ア 授業展開の工夫

- ・個に応じた指導や支援をより効果的に行うために、単元によって、一斉指導や少人数指導など学習形態の工夫を行った。また基礎的な知識を定着するために、ミニプリントの作成やコバトン問題集を活用し、授業の開始時や家庭学習で取組を推進し、つまづきを早期に発見し指導することで、児童が意欲的に取り組むことができるようになった。
- ・指導と評価の計画を見直し、ねらいを達成するためのスモールステップの設定と、個の課題に応じた声かけと手立てをもって授業に臨み、ねらいに沿った児童間での学びができたか、できないことができるようになったか、学習を通してさらに学びが深まったかなどの視点で振り返り、教師自身が授業改善に努めた。

#### イ 伝え合う力の育成

- ・児童が意欲的に課題に取り組むために、コンパクトでインパクトのある導入の視点を持ち、問いを生み出し、課題解決の見通しをもたせ、自力解決を支援した。数学的な思考力、判断力、表現力等を育成するために意図的に話し合い活動を取り入れた。対立的な状況を引き出し、数学的な考え方を育むために、児童に課題意識をもたせた上で、図や表などを用いて思考を整理することで、明確に説明できる体験を重ねた。教師が伝えたいことは児童から引き出すように努めたことで、児童が意欲的に授業に取り組むようになった。教師の話す時間、児童が考えたり深めたりする時間という視点で授業マネジメントに努めた。

## 学校全体での取組

#### ア 学習環境の整備・充実と学習規律の徹底

- ・「環境は人をつくる」を合い言葉に、授業開始前の机の整理整頓や授業規律の確認を行った。また、低・中学年を中心に、本市のスマート教員（市独自の加配教員）を配置し、複数の教員による少人数指導に力を入れた。少人数の分け方を「学力」「生徒指導」に重点を置き、単元によって分け方のねらいも変えた。間違いが許される温かな学級環境のもと、学習に集中し意欲的に取り組む児童が増えてきた。

#### イ 主体的・対話的で深い学びの実現と児童の活動時間の確保

- ・「どのような力を身に付けさせたいのか」「どう学ぶのか」を視点とした教材研究を行い、まとめと振り返りの区別と振り返りを充実させることの共通理解を校内研修で図った。また、教材の提示や個に応じた学習、調べ学習、意見交換、発表や話し合い、まとめと振り返りなどの学習活動で、指導の目的やねらいに応じたICTの効果的な活用を推進した。









# 深谷市立藤沢小学校の取組

## 1 本校の概要

本校は埼玉県北部に位置し、本年度は開校133周年目を迎える学校である。全校児童は525人、学級数20の中規模校である。

学校教育目標「なかよく、かしこく、たくましく」のもと、全教職員が一丸となって教育活動に取り組んでいる。今年度は「みんなが安心して生活できる学級をつくろうとする児童の育成～自治的、自発的な学級会の充実を通して～」を学校研究課題として学級活動の指導方法について学び、これまでの教育活動や学級経営がさらに充実したものとなるように研究を進めている。



## 2 令和2・3年度の結果

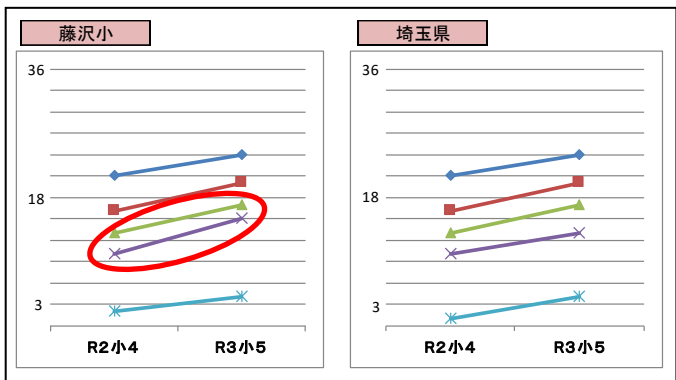
### 小学校4年生→小学校5年生の取組

#### (1) 学力の伸びから見られる特徴【算数】

##### 今までの学力の変化

	小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生	中学校3年生
レベル12						
レベル11						
レベル10						
レベル9						
レベル8						
レベル7						
レベル6						
レベル5						
レベル4						
レベル3						
レベル2						
レベル1						

##### 学力の伸びの状況

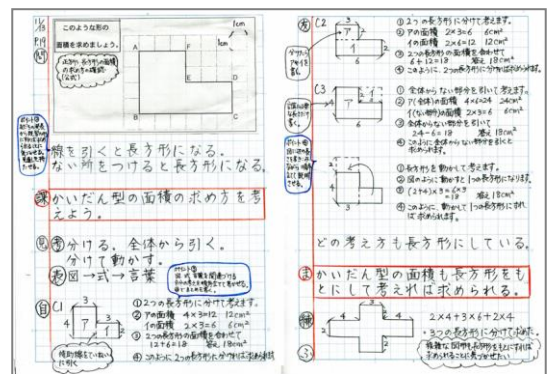


- 算数の学力のレベルが4ポイント上昇しており、県の伸びを上回っている。
- 中位層の学力の伸びが大きい。

#### (2) 伸びを引き出した効果的な取組

##### ア 学年での共通の指導

児童のノートに、単元間や学年間の学習内容のつながり（系統性）を大切にするために残したい図・表・グラフ等を印刷して貼らせることで、学習内容の足跡がしっかりと残るようにした。また、教師の作成したノート指導案を学年で共有し、ポイントを押さえた授業を展開した。



ノート指導案

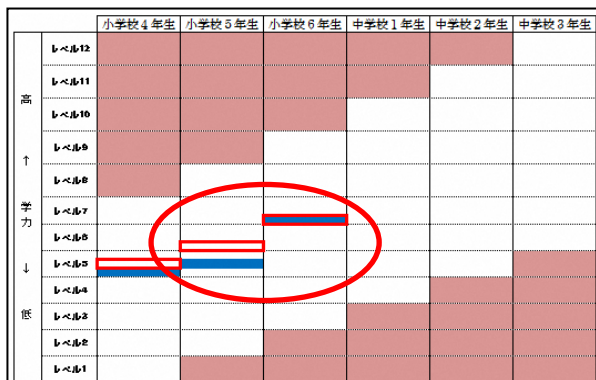
##### イ 教師の意図的な発問による練り上げの充実

児童の考えを比較・検討する場面においては、教師の一方的な説明や上位層の児童中心による授業進行を避けるためにも、教師が意図的な発問をし、下位層から上位層まで多くの児童を巻き込んで共通の考え方等を練り上げられるように工夫している。具体的には、教師が児童の考えを「つながり発問」と「ねらった発問」によって、学習内容の共有化を図れるようにした。また、必要に応じてペアやグループでの話し合い活動も取り入れ、児童同士が共に学び合えるようにした。

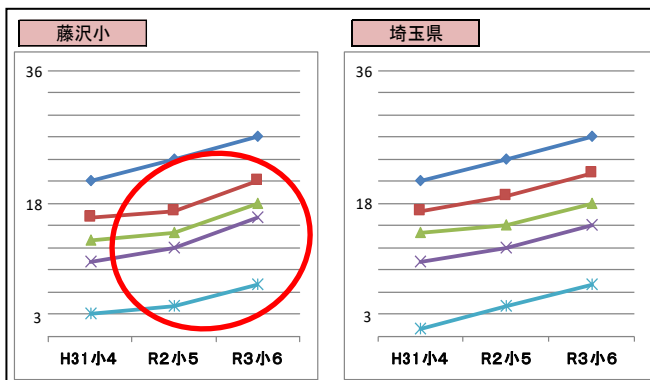
## 小学校5年生→小学校6年生の取組

### (1) 学力の伸びから見られる特徴【算数】

#### 今までの学力の変化



#### 学力の伸びの状況



- 算数の学力のレベルが5ポイント上昇しており、県の伸びを上回っている。
- 小5から小6にかけて、中位層と下位層の学力の伸びが大きい。

### (2) 伸びを引き出した効果的な取組

#### ア 効果的な少人数指導とTT（チームティーチング）の実施

単元の初めは少人数指導を行い、単元末の練習問題のときにはTTで授業を行った。TTの授業では、自力で問題を解くことができる児童には、T1が丸付けをしたり発展問題を与えたりし、つまづいている児童には、T2が個別指導をしながら見届ける体制をとった。単元末の練習問題をTTで行うと、学級全体の児童の習熟度を把握でき、個に応じた指導を充実させることができた。

#### イ プリントを活用しての反復練習

テスト返却後に、間違えた問題箇所の直しを徹底した。分からない問題については、教師が分かるまで丁寧に教えた。さらに、類似問題のプリントを配布し、隙間時間を使ってできるようになるまで繰り返し取り組ませ、確実な見届けを行った。

## 学校全体での取組

#### ア 算数の学習の進め方の統一

年度当初に、全職員で「ノート の 使い方」や「板書 の 書き方」について共通理解・共通行動を図っている。どの教師も同じような授業スタイルで指導することにより、どの児童も混乱することなく、安心して授業に臨むことができています。

#### イ もくもくタイム

木曜日の朝学習の時間を「もくもくタイム」と設定し、算数の問題に取り組んでいる。低学年は、計算プリントを活用し、計算領域の習熟を主な目的としているが、4年生以上の学年では、全国学力・学習状況調査の記述式の問題にも取り組ませ、問題に慣れることや思考力・判断力・表現力を伸ばすことにも力を入れている。

#### ウ 基礎的・基本的な内容の確実な定着

計算ドリルを活用し、少なくとも3回は同じ問題に取り組ませるようにし、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図っている。また、2月の学力向上週間を利用し、3年生以上の学年は、県が作成している復習シートを積極的に活用している。朝学習の時間や家庭学習等でも取り組ませ、学習内容のさらなる定着や復習に役立てている。







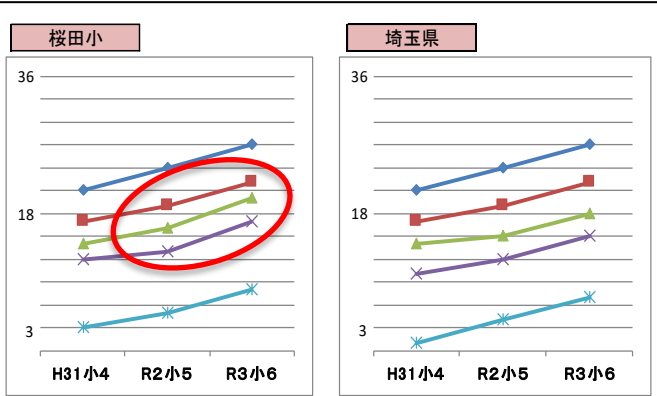
## 小学校5年生→小学校6年生の取組

### (1) 学力の伸びから見られる特徴【算数】

#### 今までの学力の変化

	小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生	中学校3年生
高	レベル12					
	レベル11					
	レベル10					
↑	レベル9					
	レベル8					
	レベル7					
↓	レベル6					
	レベル5					
	レベル4					
低	レベル3					
	レベル2					
	レベル1					

#### 学力の伸びの状況



- 小5から小6にかけて学力のレベルが4上昇し、県平均の伸びを上回っている。
- 中位層の学力の伸びが大きい。

### (2) 伸びを引き出した効果的な取組

#### ア 少人数指導

4学級を5グループに分け、少人数指導を行った。そのうち1つのグループは、希望制で単元の内容に苦手意識のある児童を対象とし、学習内容に応じて児童の実態に合う指導をした。単元ごとにレディネステストを行い、児童の実態を把握した上でグループ分けを行った。

#### イ 算数ドリル、コバトン問題集の活用

児童は計算ドリルに加え、算数ドリルやコバトン問題集に取り組んでいる。その時間で学習した内容の問題に取り組み、児童一人一人が自分で解けるようになるまで指導し、習熟度を高めた。また、月に2回、業前の時間を算数チャレンジタイムとして学校全体で取り組んだ。15分という限られた時間の中で問題を解き、答え合わせや直しをしている。



### 学校全体での取組

#### ア 特別の教科 道徳と、特別活動を中核に据えた学級経営

校内研修で、道徳と特別活動を中核に据えた人権教育にH29～R元年度の3年間取り組んできた。R2年度以降もコロナ対策をしながら児童同士が互いに認め合う、心豊かな関わり合いができる学級づくりに力を入れ、児童が安心して学び合える場を整えるようにした。

#### イ 学校で統一された板書の仕方

問題、課題、まとめ、振り返りなど、授業やノートへの書き込みの流れが身に付いており、見通しをもって学習に取り組むことができた。

#### ウ 漢字・計算オリンピックの実施

毎学期末に、漢字50問、計算20問のテスト（漢字・計算オリンピック）を実施し、全児童が90点以上取れるまで何度でも取り組ませている。90点以上取れた児童に「学びの種子賞」という賞状を渡し、児童の意欲の向上を図っている。





# 川口市立西中学校の取組

## 1 本校の概要

本校は、川口市中心部の西側に位置する開校75年を迎えた伝統校である。全校生徒数583名、学級数16の中規模校である。



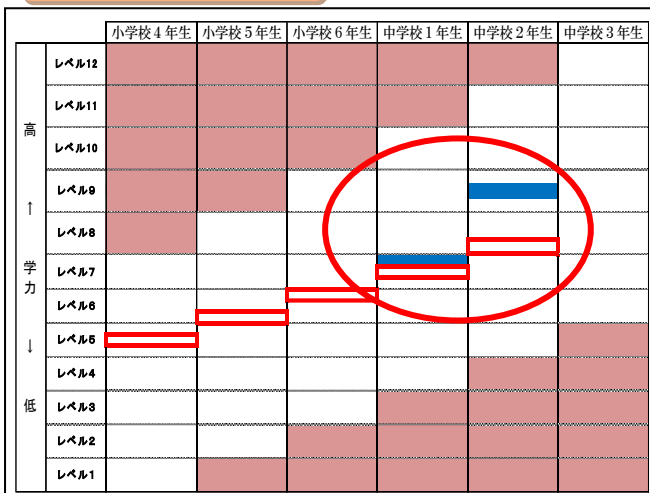
学校教育目標「豊かな心と学ぶ意欲を持ち、たくましく生きる生徒」のもと、その歴史と伝統とともに、文武両道の精神を大切にし、学業と部活動の両立を目指しながら日々の教育活動を行うことで、生徒は活気と潤いのある落ち着いた学校生活を送っている。学業の面においては、今年度「主体的に行動することで学ぶ喜びを実感させる学習指導」を研究主題とし、「教えられる・受ける授業」から「学ぶ・考える授業」に取り組んでいる。部活動では、運動部・文化部ともに盛んで、県大会出場の部が多く、関東・全国レベルの活動をしている部活動もある。

## 2 令和2・3年度の結果

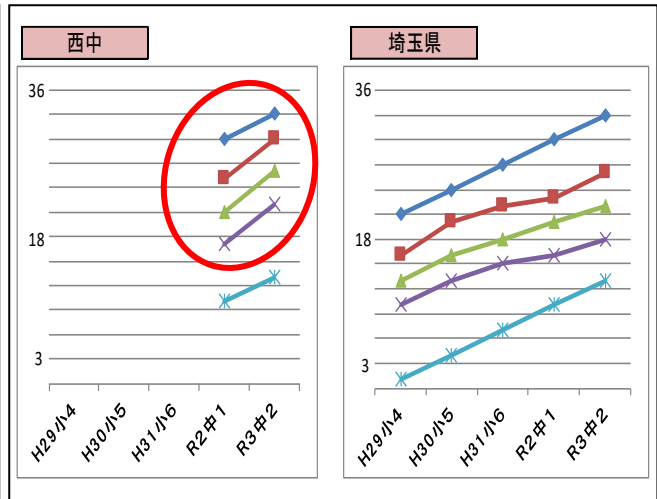
### 中学校1年生→中学校2年生の取組

#### (1) 学力の伸びから見られる特徴【数学】

##### 今までの学力の変化



##### 学力の伸びの状況



○本校の数学の学力の伸び（平均）が県の学力の伸び（平均）を3段階上回っている。

○全体的に順調な伸びを見せているが、特に中位層、上位層の伸びが大きい。

#### (2) 伸びを引き出した効果的な取組

##### ア 見通しと振り返りの実施

学習課題を設定する際は、日常生活や社会と関わりを持たせることで、自分事として捉えられるようにした。また、生徒が見いだした問いから課題を作成することで、生徒は見通しを持ち、「何ができるようになるか」という資質・能力ベースのまとめ・振り返りを行えるようにした。

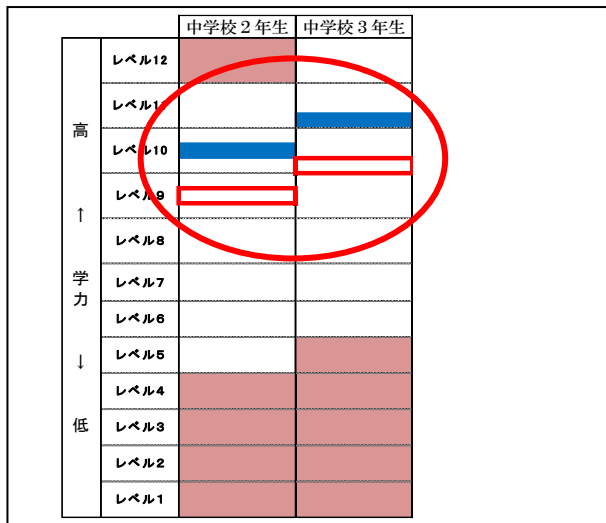
##### イ 自分の考えを表現し伝え合う時間の充実

絵・図・表・グラフ・式・言葉などを用いて考えたことを説明したり、互いに自分の考えを表現したりして伝え合う学習活動を積極的に取り入れた。その際、教師は、ファシリテーターとして、子供の発言をつなぐ役割を徹底した。また、生徒がそれぞれの考えに共通点や相違点を見いだしたり、問題の条件を変えて考えてみたりするなど、思考を深める場面を通して、統合的・発展的に考える力を育成した。

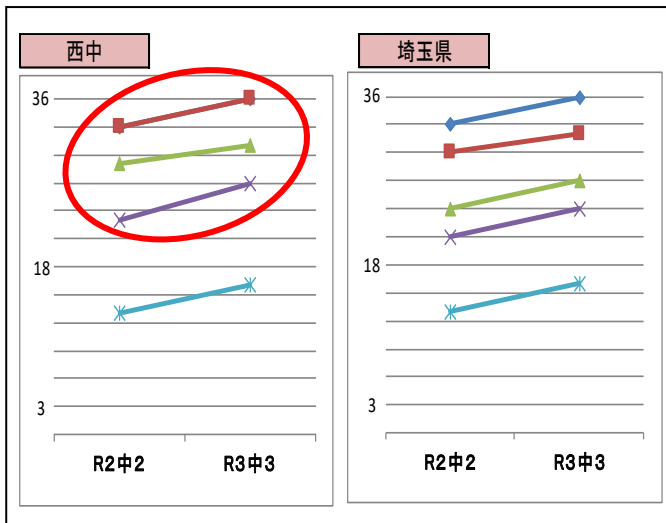
## 中学校2年生→中学校3年生の取組

### (1) 学力の伸びから見られる特徴【英語】

#### 今までの学力の変化



#### 学力の伸びの状況



- 全体的に学力のレベルの高い生徒が多く見られ、順調に学力を伸ばしている。
- 中位層の学力の伸びが大きい。

### (2) 伸びを引き出した効果的な取組

#### ア 生きて働く知識・技能の定着を図る指導

新出文法事項の導入の際に、関連する既習言語材料を織り交ぜながらモデルを示すとともに、繰り返し活用する活動を行うことで、多様な表現の定着を図った。「学習したことを用いて聞く・話す・読む・書くことができた」等の小さな成功体験をスモールステップで積み上げることで、学習内容の定着を図る指導を行った。

#### イ ICT端末を授業に活用した取組

ICT端末を教師の評価や見届けに活用するだけでなく、生徒が自分の発話内容を振り返ることに活用した。例えば、録音する機能を使い生徒の録音した音声を用いて個々の評価をきめ細かく行うだけでなく、自分の音読や発表の様子を聞いてより相手聞き取りやすいよう工夫するなど生徒の取組にも生かすことができた。また、アンケートや投票、小テストを簡単につくることができるアプリ (Forms) を用いてこまめに小テストを授業内で実施し、生徒へ結果のフィードバックを容易に行うことで、きめ細かな指導や評価をすることができた。

## 学校全体での取組

#### ア 「5つの授業実践」を意識した授業

「教師は授業で勝負」するために「1 基本的な学習ルールへの定着」「2 ねらいを明確にし、学習に見通しを」「3 ねらいに迫る発問・活動の工夫」「4 意欲を高める教師の声かけ」「5 達成状況の見届けと支援 (振り返り)」の5つについて常に教員が意識することで、毎授業において効果的な見通しと振り返りのある授業を行った。

#### イ 各教科等におけるICT端末の積極的活用

各教科等においてICT端末の積極的な活用を図り、個別・協働的な学びを取り入れ、学習の充実を図った。例えば、各教科等のそれぞれの単元において、生徒が個々に調べ学習等で用いたり、ブレイクアウトルームを用いてグループ学習に取り組んだりすることで、一人一人の生徒が主体的に学ぶ意欲を持って学習に取り組めるようになった。



# ふじみ野市立大井中学校の取組

## 1 本校の概要

本校はふじみ野市西部に位置し、開校74年を迎えるふじみ野市内で最も古い歴史のある中学校である。全校生徒数は585名、学級数は18学級で規模の大きな学校である。学校教育目標「心豊かでたくましい生徒」のもと「全教職員の叡智と総力を集結した学校づくり」に邁進している。

本校の特徴として学校運営協議会を設置し、保護者・地域・学校が一体となり共に子供たちを育む、ふじみ野市版コミュニティスクールの実現に取り組んでいることが挙げられる。生徒は良き伝統を受け継ぎ、地域との交流を深めながら、学校生活を送っている。

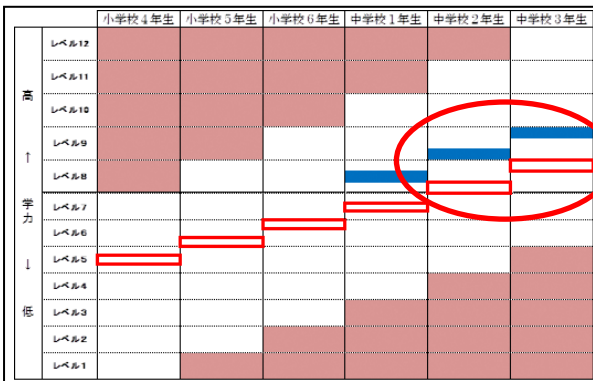


## 2 令和2・3年度の結果

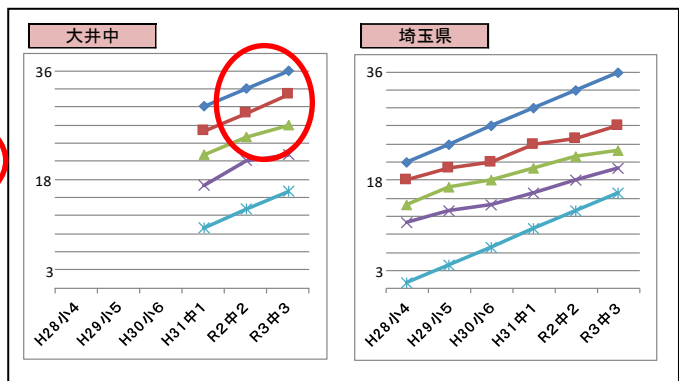
### 中学校2年生→中学校3年生の取組

#### (1) 学力の伸びから見られる特徴【数学】

##### 今までの学力の変化



##### 学力の伸びの状況



- 学力のレベルが県平均に対し、中1、中2、中3と継続して3段階高くなっている。
- すべての学力層で伸びが見られたが、特に中位層から上位層の学力が大幅に伸びている。

#### (2) 伸びを引き出した効果的な取組

##### ア 少人数指導による個に応じた指導の実施

学級を半分に分け、毎時間少人数で授業を行うことで、きめ細やかな指導を実現した。単元ごとに担当する教員を変えたり、内容によって一斉に授業を行ったりするなど、教員が複数いることを生かした授業スタイルを確立した。また数学部会を毎週行い、教材理解や授業方法などを話し合うことで、質の高い授業の実現に取り組んだ。数学担当が全員で話し合い、授業で使用する教材やテスト問題なども生徒の実態に合ったものを作成することができた。

##### イ 数学班による教え合い活動

授業では数学的活動を4人班で行うことを1年次から継続して取り組んできた。4人の中で数学長という役割をつくり、分からない問題は気軽に聞ける雰囲気醸成した話し合い活動を行っている。話し合い活動では、数学長は答えを教えないというルールにしており、どのような説明が分かりやすいかを考え、自分の理解をさらに深めることができた。その成果として中位層以上の伸びにつながっていると考える。

##### ウ ICTを活用した授業の展開

全教室（少人数教室も含め）にスクリーンとプロジェクターが設置してあり、関数や図形、資料の活用の単元では積極的にデジタル教材を活用してきた。また、1人1台のタブレット端末を使うことで、個に応じた学びができた。さらに、画面共有機能を活用し、他の生徒の考え方と交流することができ、多様な考え方をすることで、学びを深めることにつながった。



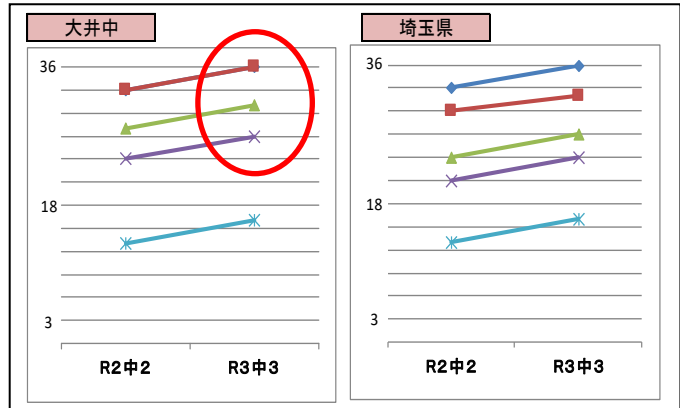
## 中学校2年生→中学校3年生の取組

### (1) 学力の伸びから見られる特徴【英語】

#### 今までの学力の変化

		中学校2年生	中学校3年生
高	レベル12		
	レベル11		
	レベル10		
	レベル9		
	レベル8		
↑	レベル7		
	レベル6		
	レベル5		
↓	レベル4		
	レベル3		
	レベル2		
	レベル1		
	低		

#### 学力の伸びの状況



- 学力のレベルが県平均に対し、中2では3段階高かったが、中3では4段階高くなっている。
- 学力のレベルが県平均より高い学力層でも、さらに学力の伸びが見られている。

### (2) 伸びを引き出した効果的な取組

#### ア デジタルコンテンツを活用した学年で統一した授業の実施

同一学年を複数の教員で指導する場合、指導法の相違により学習進度や定着率に差が生じることが懸念される。本校英語科では授業で活用するデジタルコンテンツや教材教具を英語科教員で共同開発している。開発した教材教具は毎週の教科部会で活用場面等を協議、検討後に全学級統一した授業を実施することで質の高い授業を実現している。また、英語科職員全体で授業を創り、開発した教材教具を共有することにより、英語科職員の教材研究・準備の効率化につながり、働き方改革の一助となっている。



#### イ 主体的・対話的で深い学びを促す言語活動の実施

生徒の主体的な学びを促す言語活動実現のため、言語活動時において単なる「情報交換」で終わるのではなく、お互いの主張や考えに対して質問や意見交換に取り組んでいる。生徒一人一人がコミュニケーションの質を向上させようとする中で、会話の論理的な構成や、正確で適切な表現ができるようになり、対話的な学びによる生徒の考えの広がりや深まりが見られるようになった。

### 学校全体での取組

#### ア 学力向上のための話し合い活動の充実

令和2年度の「西部地区学力向上のための授業研究会」では特別活動の授業提供校として、感染症対策を施しながら、学力向上につなげる効果的な話し合い活動の研究に全校で取り組んだ。課題に対し「合意形成」へと導く指導法について研究を推進し、各教科の指導法の改善を図ることができた。

#### イ 生徒の学びを止めないICT端末を活用した「個別最適化された学び」の実現

ふじみ野市教育委員会の委嘱を受け、「生徒が見通しを立て、ICT端末を活用して学習する研究～GIGAスクール構想の実現に向けて～」を研究した。「生徒の学びを止めない」を合言葉に全職員でデジタルコンテンツ（授業動画・家庭学習課題等）を作成し、臨時休業期間中も学校ホームページから日々配信を行い、生徒の学習に対する不安解消の一助とする等、個別最適化された学びの実現に向け取り組んだ。

#### ウ 「主体的・対話的で深い学び」を促すソーシャルスキルトレーニングの導入

令和2年度から埼玉県教育委員会「生徒指導モデル校」として、生徒同士の望ましい人間関係を育むため、毎月第2火曜日に「TFC (Tuesday Friends Communication)」として全校でソーシャルスキルトレーニングに取り組み、生徒間の望ましい人間関係を育むことができた。



# 横瀬町立横瀬中学校の取組

## 1 本校の概要

本校は、全校生徒数207人、学級数7学級の小規模校である。学校教育目標「よく学び 心を正し 全力尽くす」のもと、全教職員が改善と創造の意識を持って教育活動に取り組んでいる。令和2・3年度は横瀬町教育委員会の委嘱を受け、研究主題を「基礎学力の定着と主体的に学ぶ生徒の育成」と設定し、学ぶ楽しさを取り入れた授業やICTを活用した授業及び自主学習の充実に係る研究を進めている。

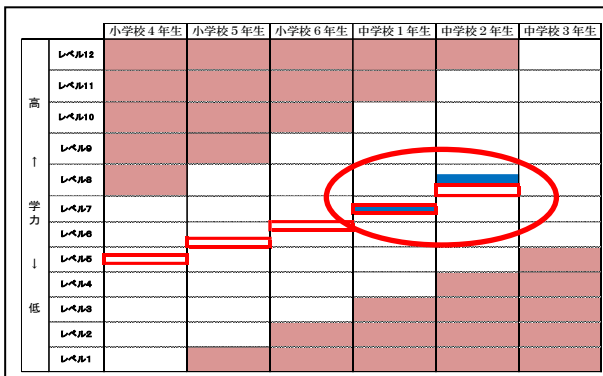


## 2 令和2・3年度の結果

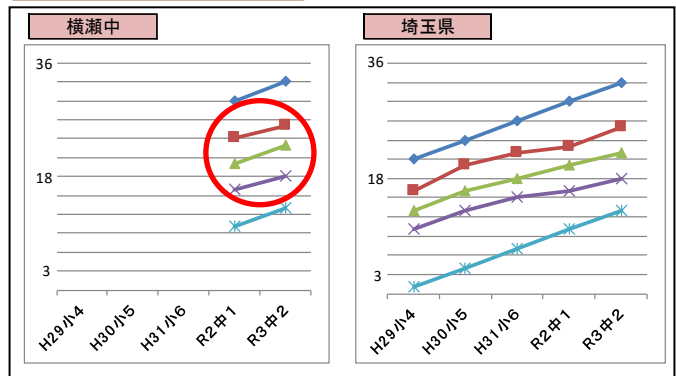
### 中学校1年生→中学校2年生の取組

#### (1) 学力の伸びから見られる特徴【数学】

##### 今までの学力の変化



##### 学力の伸びの状況



- 学力の伸びが県平均を上回るとともに、中位層の伸びが大きい。
- 学力を伸ばした生徒の割合が81.6%で、全体的に学力を伸ばすことができている。

#### (2) 伸びを引き出した効果的な取組

##### ア 学習方略の向上を意識した取組

###### ・柔軟的方略を意識した取組

生徒自身が自分の状況に合わせた学習方法ができるように、数学を担当するJプラン教員が中心となり、小学校の学習内容も確認しながら授業を行った。また、家庭学習では、生徒の実態に合わせ、学習したことをまとめる学習から問題を繰り返し解く学習に変えるなどアドバイスした。

###### ・作業方略を意識した取組

授業の初めには5分程度の小テストを行い、繰り返し練習する機会を設けたり、家庭学習では問題集を繰り返し取り組んだりするようにするなど、作業を中心に学習を進めるようにアドバイスした。

###### ・人的リソース方略を意識した取組

学力の上位層と下位層が同じ班になるように班編成を行い、授業中に班内での教え合い活動を充実させた。学力上位層の生徒の考え方を参考にし、全体で確認する前に班内で考え方を確認することで、自身の解答について考える時間を設けた。

取組の結果、学習方略の数値は、どの項目も県平均を上回る結果となった。特に作業方略と人的リソース方略の項目は、0.3ポイント上回った。また、変化量では、特に柔軟的方略と人的リソース方略に伸びが見られた。



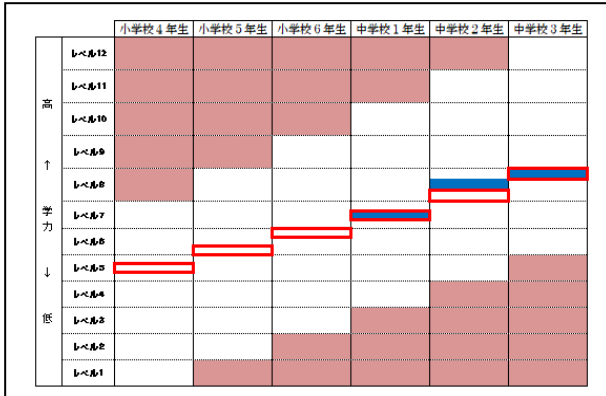
##### イ 学習指導員を活用したチーム・ティーチング

学習指導員を配置し、毎時間チーム・ティーチングを行った。主に学力のレベルが全体的に低い生徒への支援を担当し、コロナ禍において学習の遅れが出ないように配慮した。

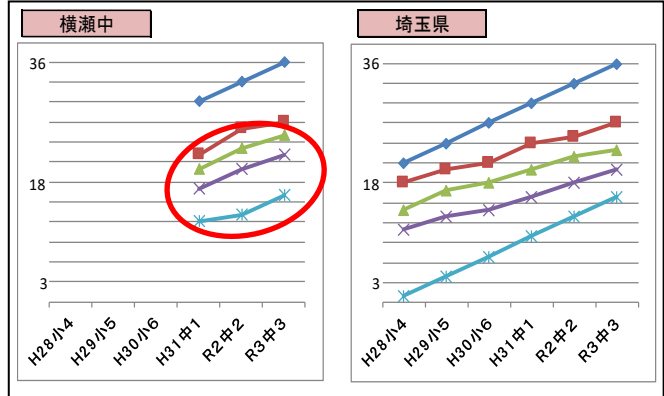
## 中学校2年生→中学校3年生の取組

### (1) 学力の伸びから見られる特徴【数学】

#### 今までの学力の変化



#### 学力の伸びの状況



- 中位層及び下位層の学力が県平均よりも高くなっている。
- 下位層の学力の伸びが大きい。

### (2) 伸びを引き出した効果的な取組

#### ア 個に応じたきめ細やかな少人数指導

第3学年では、生徒の希望を確認した上で、「基礎コース」と「標準コース」の2つのコースで習熟度別少人数指導を実施している。そのクラス編成では、「基礎コース」の人数が少なくなるように配慮している。また、「学びタイム」や「横中検定」という基礎学力の定着を目指した取組を行っている。合格するまで丁寧に指導し、基礎・基本の定着を徹底させた。このことにより、問題を解くことができない理由を明確にし、「分かる」を「できる」に変えられるように指導している。



#### イ 本時の目標、まとめを意識した授業の取組

毎時間、生徒が授業の見通しを持てるように本時の目標を明確にしている。また、まとめと振り返りも毎時間行っている。生徒が何を学んだのか、何が分かったのかを振り返ることができることが大切であると考えている。

#### ウ 『分かる』を『できる』に変える学び合い授業

自分の考えを書いたり、考えたりすること自体を苦手とする生徒が多い。そこで、自分にはない考え方や解き方を生徒同士が共有し、学び合いの中で理解できるようにしている。特に、十分に理解できていない生徒については、他の生徒がミニティーチャーとして教えることで、教える側の理解の向上にもつながることができた。

## 学校全体での取組

#### ア 学習規律確立のための「授業スタンダード」の策定

生徒にとって最低限身に付けてほしい態度を一覧にまとめ、令和2年度より全校で取り組んでいる。これにより、授業規律が確立され、集中して授業に取り組める環境となっている。

#### イ 授業における学習活動の充実（ICT活用・課題提示）

それぞれの教科で動画や視覚的資料などを効果的に用いて、思考力・判断力・表現力を育む学習活動に取り組んでいる。また、授業の課題を明確にするため、原則「？」（疑問形）で課題を設定し、問題解決型授業を展開できるようにしている。

### 横瀬中学校 授業スタンダード

#### 授業のはじまり

- ☆チャイムが鳴る1分前には着席をしている
- ☆礼儀正しく授業前の挨拶をする

#### 授業中

- ☆姿勢よくイスに座る
- ☆肘を伸ばして挙手をする
- ☆相手に伝わる声の大きさと発表や返事をする
- ☆目と耳と心で相手の話を聴く

#### 授業の終わり

- ☆礼儀正しく授業後の挨拶をする
- ☆次の授業の準備をしてから休み時間にする





# 白岡市立篠津中学校の取組

## 1 本校の概要

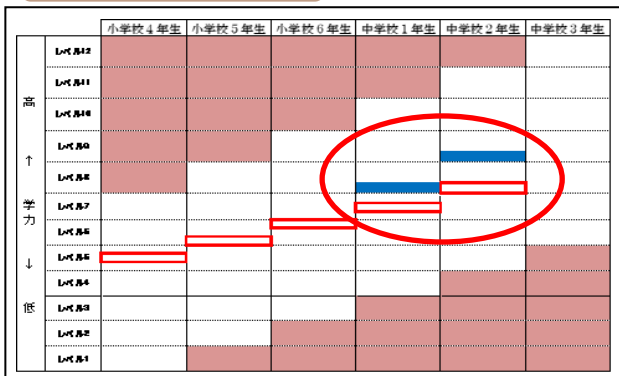
本校は白岡市のほぼ中央部に位置し、開校75年目を迎える、全校生徒数444名、学級数14学級の中規模校である。学校教育目標『自立』のもと、「進んで学ぶ生徒・心豊かな生徒・行動力のある生徒」の育成を目指し、全教職員が一丸となり教育活動に取り組んでいる。令和元年度に「言語活動の充実」のテーマのもと白岡市教育委員会委嘱の研究発表会を行い、令和3年度からは研究主題を「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善 ～GIGAスクール構想と個別最適な学びを目指して～」と設定し、授業改善を図り生徒一人一人の学力向上を目指した授業づくりに努めている。

## 2 令和2・3年度の結果

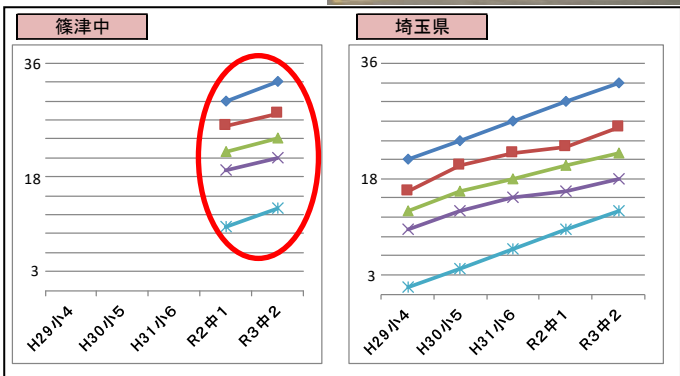
### 中学校1年生→中学校2年生の取組

#### (1) 学力の伸びから見られる特徴【数学】

##### 今までの学力の変化



##### 学力の伸びの状況



○数学の学力のレベルが、中1では2段階、中2では3段階、県平均を上回っている。

○学力の伸びは、上位層・中位層・下位層、全ての層で順調に伸びている。

#### (2) 伸びを引き出した効果的な取組

##### ア 1時間の授業を見通すことができ、興味もてる導入の工夫

毎時間、学習内容を見通すことができるように、導入での課題提示場面で1時間の授業の流れを明確にしている。また、日常生活（例えば天気予報やニュース、話題になっている出来事、流行など）の中から学習内容に関連することを導入で触れ、生徒が興味・関心をもって授業に取り組めるように工夫している。



##### イ 個人とグループ活動を織り交ぜた、学習内容の定着をねらった授業展開

授業の最初には「学力向上ワークシート」等を活用して、毎時間ミニテストに取り組み、学習内容に対する理解の確認と定着をねらっている。課題解決ではまず自力解決し、その後グループ活動でタブレット端末を活用して解決方法等を共有している。その中で、課題解決ができなかった生徒も、どこが分からなかったのか生徒同士で共有できるようにしている。理解できたこととできなかったことを共有することにより、学び合い、教え合いの環境づくりに努めている。一人一台端末環境の整備により、タブレット端末の活用により情報の共有が容易になった。

##### ウ 振り返りを通して、生徒個々のつまずきの把握

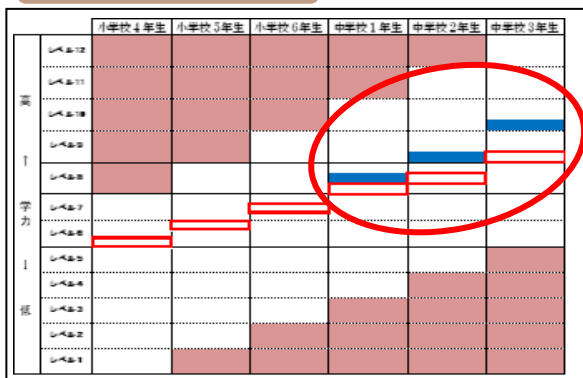
授業の終末は、必ず振り返りを記入して自己評価をする時間を設けている。それにより、教師が生徒のつまずきなどを確認し、個別の指導に生かしている。また、ノート点検を通して、アドバイスやコメントを記入することで学習内容の定着を図っている。



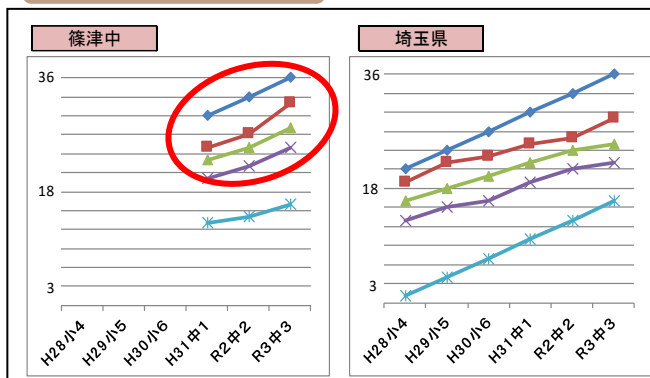
## 中学校2年生→中学校3年生の取組

### (1) 学力の伸びから見られる特徴【国語】

#### 今までの学力の変化



#### 学力の伸びの状況



- 国語の学力のレベルは県平均を上回り、学年が上がるにつれて県平均との差が大きくなっている。
- 特に上位層から中位層の学力の伸びが大きい。

### (2) 伸びを引き出した効果的な取組

#### ア 日々の授業で年間を通して実践している取組

一年間を通じて、授業の最初に漢字テストを実施し、毎時間「漢字を書くこと」に集中させる時間を確保している。さらに、一時間の授業で一つのことわざを学習することにより、知識の定着を図るとともに語彙力の向上を目指している。また、朗読練習にも年間を通して取り組み、正確に読む力を身に付けさせ、一つ一つの言葉を大切にする授業を実践している。



#### イ 感想記入と話し合い活動を繰り返し、生徒同士で情報を共有

授業の課題を提示後、学習に対して見通しをもつために課題に対してどのような学習イメージをもったかをICT端末に記入している。それをもとに課題に対しての話し合い活動を実施し、ICT端末を活用して生徒同士でイメージの共有を図った。特によい発想のものは学級全体で共有した。さらに、生徒同士の情報を共有した後、再度生徒個人の感想を書くことにより、考えの変容を確認している。

#### ウ ノート点検や学習状況の確認を通して個別最適な学びの実践

生徒の授業ノートやワークシート、ミニテスト、定期テスト等を確認・分析することにより、個々の生徒のつまづきを把握し、アドバイスをしながら、学力の向上を図っている。また、間違い直しを徹底して行い、生徒それぞれの課題改善に取り組んでいる。

## 学校全体での取組

#### ア 主体的・対話的で深い学びを目指した授業改善

生徒が学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって主体的に学び続けることができるよう、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」の学びの改革を推進している。また、主体的・対話的で深い学びを実現するための手段として個別学習を充実させるために、GIGAスクール構想により、導入されたICT端末を有効活用し、ICT端末を授業にどのように取り入れていくかを全教科・全教職員で研究し、授業改善に取り組んでいる。

#### イ 教職員同士も「学び合い・深め合い」を実践

教職員全員がライブ授業研究会など年間一人一回以上研究授業を行い、研究協議で得られる指導の新しい視点や意見をもとに、各教科の研究を進めている。研究の視点や生徒アンケートを含めた検証法についても、各教科で設定している。

